

密教経典を権威づける

—Ratnarakṣita 著 *Padminī* 第1章前半和訳—¹

種村隆元・加納和雄・倉西憲一

はじめに

本論文は、筆者が『川崎大師教学研究所紀要』創刊号にて発表した、「Ratnarakṣita 著 *Padminī* 第1章前半 — Preliminary Edition および註 —」（種村・加納・倉西 2016）にもとづく、当該箇所のと訳註である。和訳の提示に先立ち、今一度 *Padminī* 第1章のシノプシスを以下に提示する。

Padminī 第1章 *Adhyeṣaṇāpaṭala* の構成

- ・ 帰敬偈
- ・ 総義 *samudayārtha* (*pravṛtṭyaṅga*, *śāstrārambha* の提示)
- ・ 各義 *avayavārtha* (経序 *nidānavākya* の解説)
 - A 経序 *nidānavākya* 解説 (第一義的な解説)
 1. 如是我聞一時世尊 *evaṃ mayā śrutam ekasmin samaye bhagavān* の解説
 2. 処円満 *sthānasampat*
 3. 会衆円満 *parṣatsampat*
 4. 懇請者円満 *adhyeṣakasampat*
 - a. タントラの語義解釈
 - b. 3種のタントラ *tantratraya*
 - i. 果のタントラ *phalatantra*
 - ii. 因のタントラ *hetutantra*

¹ *Padminī* 第1章の読解にあたり、苫米地等流 (人文情報学研究所), Diwakar ACHARYA (Oxford 大学), Somdev VASUDEVA (京都大学), 横地優子 (京都大学), 宮崎泉 (京都大学) の各先生から貴重なご意見を賜った。ここに謝意を表します。(当然のことながら、本論文のいかなる誤りも筆者自身が責任を負うものである。)

- B 経序別解 (第二の秘儀的な解釈) = iii 方便のタントラ upāyatantra
- C 傍論：果としての持金剛位に対する論難とそれへの回答
- D タントラ全体の要義 tantrapiṅḍārtha の解説 (*Samvarodayatantra* 各章の要約)

今回和訳を試みた箇所は、冒頭から各義の B: 経序別解 (第二の秘儀的な解釈) までである。Ratnarakṣita はまず序文全体の意味の解釈を提示し、*Samvarodayatantra* が伝説であることを述べ (総義), そののち序文の逐語的な解釈 (各義)に移っていく。各義の第一義的解釈においては、伝統的な五成就に沿う形で註釈を進めていく。ここでは、*Samvarodayatantra* が伝統的な仏教經典のスタイルを踏襲しているということ を主張しようとする Ratnarakṣita の意図がうかがえる。

一方各義の秘儀的な解釈では、序文の各語の表面的な意味の背後にある、密教的な意味を提示することを目的としている。この秘儀的な解釈では、なぜそのような解釈が可能になるのか理解することが困難な場合も多い。脚註においては、Ratnarakṣita の秘儀的な解釈の背景を可能な限り註釈することを心がけたが、まだまだ不明な点が多く残されており、今後の課題とさせていただきたい。

略号

本論文で使用する略号は以下の通りである。

- D sDe dge edition
- em. an emendation
- Ota. D. SUZUKI (ed.) *The Tibetan Tripitaka, Peking Edition: Kept in the Library of the Otani University, Kyoto: Reprinted under the Supervision of the Otani University of Kyoto: Catalogue & Index*, Tokyo: Suzuki Research Institute, 1962. 『影印北京版西藏大蔵経-大谷大学図書館蔵-大谷大学監修西藏大蔵経研究会編輯総目録附索引』 東京・鈴木学術財団, 1962.
- P Peking edition
- 大正蔵 大正新脩大蔵経
- Toh. H. UI, M. SUZUKI, Y. KANAKURA and T. TADA (eds.) *A Complete Catalogue of the Tibetan Buddhist Canons*, Sendai: Tohoku Imperial University, 1934. 『西藏大蔵経総目録東北大学所蔵版』 仙台・東北帝国大学, 1934.
- [...] 筆者により補われている箇所

(...) 筆者により加えられた説明, あるいは原文・原語

(/...) サンスクリット語にシュレーシャ(掛詞)がある場合の第2の意味を示す

尚, 脚註で引用したサンスクリット語あるいはチベット語の原文テキストに訂正を施す場合, あるいは異読情報を註記する場合には, 註記する語の先頭にアスタリスク付し, 註記する語の直後の丸括弧内に註を記載する. 例) *caitrapūrṇi*māsyām* (em.; *-māyām* E^L).

和訳

帰敬²

奥深く, 生き物たちを育む唯一の宝庫 (/世界の最高存在という唯一の宝庫), あらゆる宝石 (/[三]宝)の源, 幾百もの多様な奇瑞 (/驚異的な力) にとってのよりどころ, 神々によって攪拌されたもの (/賢者衆に親近されるもの), その身体にはアムリタを手にするラクシュミー女神を伴い (/その本体に不死(涅槃)の吉祥さを伴う), 完全な透明さにとっての基盤である (/聖者たちの恩恵にとっての基盤である), サンヴァローダヤマハータントラという大海に, 賢者たちよ, あなた方はこの世で, 従い実践すべし.

著作宣言

師の恩恵という灯の明かりによって闇が払われた炯眼にて僅かばかり見られたところの, サンヴァローダヤの諸々の意味内容が, 書き記される.

著作動機

たとえ, 私のような者は, これ(タントラという海)の奥深くに入り込むことがどうしてもできないとしても, それでも, 善行の反復修行を引き起こそうと望んで, 解説に着手するのである. もしも, どんなやり方でも大海の表面に触れることすらできないというのならば, ましてや, 正

² この冒頭の3偈頌に関しては, 種村・加納・倉西 2014b を参照. シュレーシャの技法によって偈頌の文言に二重の意味が読み込まれているため, スラッシュ記号によってそのことを提示した. 本論文の「略号」を参照のこと.

しいやりかたでそこ (タントラという海) に深く潜る人たちが、望ましい吉祥に到達することなどありえようか。

総義

1. タントラ合誦の理由

世尊はこの世において三界[の]限りない[有情たち]を救わんとして、正等覚を証得し、教え (ダルマ) の甘露により適切に人々を喜ばせた。教え導かれるものたちのうち、ある者たちはその[説法の]時にはまだ存在していなかった。その者たちに向けてこの法の合誦が行われた。合誦というのは、[経典が引き継がれる]関係の継続にもとづいた、聞かれた通りの教えの編纂のことである³。

2. 序分はタントラの伝説としての正当性および聴聞という行為発動の要因を示す

その場合、まず最初に (1)すべての神、アスラ、人間などの中で唯一の最良の教師であり(-ekasāsakatama-)、最高の他に比類なき(-paramāpratisama-)プラマーナ (基準) たるものである卓越した人物により(-pramāṇabhūtapuruṣāṭīśaya-)もたらされたものであるから(-praṇītatvena)、この聖典が(śāstrasya)自ら著作したものではないということについて、そして (2)[この聖典が]聴聞にもとづいた知識により正しく確定していることについて、自らが権威 (または基準) であることを(ātmanah prāmānyam) 宣言しつつ、「このように私により」から「請願した」まで[の一節により]合誦をな

³ *Abhisamayālamkāra*lokā には、直接仏のことはを聞法した弟子ですら内容を理解していないこともあるので、いずれそれを理解するであろうと期待される未来に現れる聞法者たちのために教えが説かれたとしても、問題はないとの旨が論じられる。また「関係の継続にもとづいた」(saṃbandhānupūrvī)なる表現も同書の近接する文脈で使用される。*Abhisamayālamkāra*lokā, chapter 1: etac ca padatrayaṃ bhagavadvacanād eva sūtrāmbhe nirdiṣṭam. tathā hi bhagavati parinirvṛte nānādhimuktiprabhāvitavād duravabodhabuddhatvāvāhakasaugatavacanaprasarasyārthādhigamābhāve katham kaiścit saṃgīṭh kriyata iti vineyajanasamdehāpanayanakāribhis tathāgatādhiṣṭhānādhiṣṭhitaṭh śrāvākādibhiḥ “katham bhagavann anāgate kāle dharmāḥ saṃgātavya” iti pṛṣṭena bhagavatā kṛtāvīparītasākṣācchravaṇenānādhigatārthenāpi dharmasaṃgītau kriyamānāyām na doṣa ity abhiprāyeṇoktaṃ dharmasaṃgīṭisūtre : “evaṃ mayā śrutam” iti kṛtvā “bhikṣavo mama dharmāḥ saṃgātavya” iti. tathā “saṃbandhānupūrvī pratipādye”tyādi. ato ’pi vacanād deśakālādivacanam.. (E^W pp. 5–6) 【和訳】「そしてこの三句は、ほかならぬ世尊のことはに基づいて経典の冒頭に示されたものである。すなわち、“世尊が般涅槃された後に、仏の境地をさとり難い人々を導き入れる善逝のことはの流布は、種々の信解から生まれ出ることにより（つまり各自の判断によって解釈が多岐化して伝説に統一がとれなくなることにより）、意味内容についての理解が無くなってしまふ場合、だれによってどのようにして合誦がなされ得ようか”，という所化の懸念を解消[しようと]する、如来の加持により加持された弟子たちが、“世尊よ、どうして未来時に教えが合誦されるのですか”，という質問を受けた世尊が、“顛倒なく直の聴聞を全うしたが意味内容を理解していない者によってすら、教えの合誦がなされるのであるから、過失はない”という意図によって[次のように]『ダルマサンギーティーストラ』に説かれたのである—“かくのごとく私は聞いた”と語ってから、“比丘たちよ、私の教えが合誦されるべきである”と。そして、“関係の継続にもとづいた (saṃbandhānupūrvī) 理解”云々とある。またこのことはによって、[説法の]時と場所などについて[世尊の]ことはがある。」

す者である聴聞者の[聴聞という]行為の発動の要因を示した。そのことは[ディグナーガにより]以下のように説かれている。

信心ある者たちにとって行為を発動する要因は教師と証人としての聴衆である。合誦をなす者は、自らの権威を確立するために場所と時間を説示するのである。なぜならば、一般世間において (loke) 話者は[合誦者の]権威が場所、時間、証人により明確に示されていると語りつつ、[その権威を]証得するのである⁴。(Prajñāpāramitāpiṇḍārthasaṃgraha vv. 3–4)

3. 説法の時間と場所は限定できない

【反論】それでは、限定された時間と場所が述べられていないのに、どのように[この經典の序文は]この[教師の権威]を知らしめるのであろうか？【答論】答える。これらの両者のみがこのこと(教師の権威)を示す主要なものではないからである。ある場合には、これらの両者ともになくても証人のみにより[教師の]権威があるからである。一方で「[合誦者の権威が]時間と場所により示されている」と[ディグナーガが述べているのは]、[それが]ほとんどの場合[そのようである]からである。[しかしながら]非密教の大乗の体系(波羅蜜理趣)においても、時間は実質的なものではないので、巡礼などを行うことにとってふさわしいという点において、場所のみが説示されるのである。しかしながらこの[經典の]場合は、教え導かれる者たちが存在するいついかなる場合にも、その説法が行われるので、場所という限定も設定不能である。したがって[すべての經典に]共通した説示のみ[すなわち evaṃ mayā śrutam ekasmin samayeのみ]がある。

4. 説法の時間と場所に言及しないのは外的対象への執着の排除のため

あるいは、時間と場所が限定されている場合もある。詳しく言えば、世尊は宗教的確信(信解)が劣っている者たちに対し声聞乗を説示し、宗教的確信が深く、かつ離欲の性行のある者たちに対し波羅蜜理趣を明かし、最高に甚深なる教えを学ぶ器の者たちに対して、吉祥なるダーニヤ[カタカ]の仏塔において(śrīdhānyacaitye)、チャイトラ月の満月の日に、吉祥なる法界語自在マンダラを確立し、あらゆるマント

⁴ この偈頌は *Abhisamayālaṃkāḥ* においても類似した文脈で引用される。そこにおいて引用の直前の文は次のようなものである。*Abhisamayālaṃkāḥ*, chapter 1: saṃgītikāreṇātmaprāmāṇyapratipādanād vineyānām sādaraśravaṇacintādikam uktam. tathā cāhacāryadignāgaḥ ... (E^w p. 15, ll. 15–18)。【和訳】「合誦者は、自らが権威/基準(ātmaprāmāṇya)であることを理解させるために、所化たちの恭敬、聞、思などを語ったのである。また同じように阿闍梨ディグナーガも[仰った]」。

ラの体系の経典(samastamantranītiśāstrān)を示した、と言われている⁵。しかしながら、[そのことは]最高真実に属する事柄ではないので、外界に固執することを廃するために、この[経典]では、それ[=時間と場所]に言及することはないのである。

5. 説法者＝説法の対象＝説法

あるいはまた、輪廻の続く限り、十方にある余すことない虚空の領域に広がっているすべてのもの(-sarvadharmā-)のそれぞれの極微の中にある、金剛宝の頂にある楼閣の内部に住することで、ここにおいて世尊が説法を行っているので、時間と場

⁵ 「吉祥なるダーニヤ[カタカ]の仏塔」は、*Kālacakratāntra* の註釈書として著名な *Vimalaprabhā* などに言及されている。*Vimalaprabhā ad Kālacakratāntra, Abhiṣekapaṭala* v.5: tato dharmacakram pravartayitvā yānatrayadeśanām kṛtvā dvādaśame māse caitrāpūrṇimāsyām *(em.; māyām E^{DB}) śrīdhānyakaṭake dharmadhātuvāgīśvaramaṇḍalam ṣoḍaśakalāvibhāgalakṣaṇam tadupari śrīmannakṣatramaṇḍalam ṣaḍvibhāgikam ādibuddham maṇḍalair viśphāritavān iti (E^{DB} p.8, ll. 9 – 11). 【和訳】「次に[世尊は]法輪を転じ、三乗の説示をなし、12ヶ月目のチャイトラ月の満月の日に、吉祥なるダーニヤカタカ[の大仏塔]において、16のカラーの部分の特徴とする法界語自在マンダラを、その上に本初仏であるところの、6つの部分からなる吉祥なる星宿マンダラを[他の]諸々のマンダラとともに広げた。」さらに、*Nāmasaṃgīti* の註釈書 *Amṛtakaṇikā* にも以下のように言及されている。*Amṛtakaṇikā* (opening line): iha khalu śrīdhānyakaṭake mahācaityasthāne nānātantraśravaṇārthibhir adhyeṣitaḥ śrīśākyasiṃho nāma buddho bhagavān caitrāpūrṇi*māsyām (em.; -māyām E^L) śrīdharmadhātuvāgīśvaramaṇḍalam tadupari śrīmannakṣatramaṇḍalam ādibuddham viśphārya tatra tasminn eva dine buddhābhiṣekam dattvā devādibhiḥ sarvamantranītim bṛhallaghutāntrabhedena deśitavān. uktaṃ ca śrībṛhadādiḥbuddhe — “gr̥dhraḥkūṭe yathā śāstrā prajñāpāramitānaye | tathā mantranaye proktā śrīdhānye dharmadeśanā ||” iti (E^L p. 1, ll. 14 – 19). 【和訳】「この場合、吉祥なるダーニヤカタカの大仏塔の場所において、さまざまなタントラの聴聞を求める者たちにより請願された、尊いお方である釈迦獅子というブツダが、チャイトラ月の満月の日に、吉祥なる法界語自在マンダラを、その上に本初仏である吉祥なる星宿マンダラを広げ、その[マンダラ]において、その同じ日に仏となるための灌頂を受け、神々とともに、様々な大部のタントラと簡略なタントラをもってすべてのマントラの体系を示したのである。そして『吉祥大本初仏』には[以下の様に]説かれている — 般若波羅蜜の実践体系においては、教師により靈鷲山において法の説示があったのと同様に、マントラの実践体系においては、吉祥なるダーニヤ[カタカ]において法の説示があったのである。」

「世尊は最初に宗教的確信(信解)の劣っている者たちに声聞乗を説き、次に宗教的確信が深く、利欲の性行のある者たちに対し波羅蜜理趣を説き、最終的に最高に甚深なる教えを学ぶ器の者たちに真言理趣を説示した」と同趣旨の内容は、*Sūta*(-melāpaka)第9章に見ることができる。*Sūta*, chapter 9: prathamam tāvad bhagavān *caramabhaviko (em. following MS C; *caramabhavika*^o E^W E^P) bodhisattvāvasthāyām dvīpādyavalokanam kṛtvā tuṣitabhuvanād avatīrya saṃtānādicaturvidhanyāyam darśayitvā vītārāgarūpam abhinirmāya hīnādhimuktikānām caturāryasatyādhigamaṃ virāgacaryām ca pratīpādyā punar mahāyānābhiniṣṭhānām aṣṭavijñānakāyādidharmanairātmyādhigamaṃ bhūmipāramitādicaryām ca pratīpādyā punaś cakravartīrūpam abhinirmāya gambhīrādhimuktikānām *satyadvayādvayādhigamaṃ (E^W; satyadvayādvayādhigamāya E^P) rāgadharmacaryām ca pratīpāditavān (E^W p. 461, l. 12 – p.462, l. 4; E^P p. 78, ll. 1 – 6). 【和訳】「最初に、菩薩のあり方に最後の生を受ける世尊が、[四]州など[の地上]を見て、兜卒天から降り、人間に生まれること(saṃtāna-)を始めとした4種類のあり方を示し、[自らを]離欲の姿に作りだし、宗教的確信の劣った者たちに四聖諦の証得と離欲の業を説き、今度は、大乘に専念する者たちに対して八色身などの法無我の証得と菩薩の修行階梯(地)や波羅蜜などの行を説き、今度は[自らを]転輪者の姿に作りだし、宗教的確信が甚深なる者たちに対して二真実の不二の証得と貪欲法の行を説いたのである。」

所の限定は述べられていないのである⁶。さらに、この[時間と場所の限定のない]序文により、教説の特徴である行為の完成の原因となるあらゆる特性が示されているのである。詳しく言うならば、「このような説法者により、このような聴衆が集まっているこのような場所において、このような請願者により請願されて、この教えが説かれた。したがって、この教えには特別な意味があるに違いない」と教導の対象である聴聞者は聞・[思・修]にことさらに注意を払うのである。なぜならば、原因の特性を述べることもまた、結果の特性の優越を明らかにするからである。あたかも完了した調理などの行為に関して(説かれた教えに相当)、[その料理を]完成させる場合の補助手段などの特性(説法者、場所、聴衆、請願者の特性に相当)を述べるようなものである。さらに、この[經典の]場合、他ならぬ説法者が説法の対象であり、説法である。そのことは『二儀軌』に

私は解説者であり、私は教えであり、私は良き徳を備えた聴聞者である。

(*Hevajatantra* 2.2.39ab)

と説かれている。したがって[*evam mayā śrutam ekasmin samaye*という一節のみで]説法・説法の対象・関係・目的・その[究極の]目的すべてが述べられているのである。その場合、この33章からなるこのタントラが説法である。支分をともなった二次第の形をとる原因と結果を本性とする、世尊たる吉祥サンヴァラが説法の対象である。その[タントラとサンヴァラの]両者の間にある、説法と説法の対象[である]という特徴が関係である。教導の対象となる者たちの[心]相続におけるタントラの意味の理解が[この]聖典の目的である。段階的に2種の障害(煩惱障と所知障)を取り去ることにより、すべての人々を援助する大印の成就が究極の目的(*prayojanaprayojanam*)である。

以上が[序文の]総義である。

⁶ *Kṛṣṇayamāritantra* の註釈書 *Sahajālokapañjikā* にも説法した場所について類似の解説がなされている。*Sahajālokapañjikā*: *bahuvacanam sakalatrai lokyapratiparamāṇvantarvarttidharmodayāntar-gatakūṭāgāre sakalamāṇḍale yasahitasya bhagavataḥ svavidyāvdayasukhātmakasya pratibhāsanāt* (f. 9v2 – 3).

「極微の中にある金剛宝の頂にある楼閣」という表現は、巨大な存在が極少の存在に内在する不可思議さを説く表現であり、類例は『華嚴経』「如来性起品」などにみられる。そこでは、世界のすべてを一切切切描写した三千大千世界の大きさの巨大な画布(キャンパス)が、極微大の塵(*paramānūrajas*)の中に封じ込められ、それをある智者が取り出すという比喩が語られる。この比喩は、如来が、衆生の心に封じ込められる仏智を知らしめて、仏智を解放しようとすることを教えしめすものであり、『宝性論』に引用の形で現れる(*Ratnagotravibhāga*, E¹ pp. 22–24)。

別義

「私はこのように聞いた．ある時世尊はすべての如来の金剛のごとき身体・言語・心であるところの，ヨーギニーたちの女陰にいた．」

(*Samvarodayatantra* 序文)

A. 経序解説（第一義的な解説）

1. 如是我聞一時世尊 *evaṃ mayā śrūtam ekasmin samaye bhagavān* の解説

一方，[序文のそれぞれの]部分の意味は[以下のように]述べられる。「このように」とあるのは，「私がこれから説くのとまったく同様に過不足なく」という意味で，この[言葉]により合誦者は[聴衆に]自身の記憶を取り戻させるのである(*dhāraṇīpratīlambhaṃ pratipādayati*)⁷。「私により聞かれた」とあるのは，説かれる意味を堅固にするために，直接の聴聞にもとづく理解により誤解の懸念を払拭するのである。あるいは，直観されたのではなく，あるいは自らにより作られたのでもなく，私により聞かれただけであるということにより，その同じ教えが最高に甚深であることを説示するのである。あるいは，最初に私によりこのように聞かれ，他の者たちによっては別様にも[聞かれたという意味である]。なぜならば，世尊の説法は[聴衆の]宗教的確信にもとづいて，多様なあり方で行われるからである。

「ある時」とは，一刹那において世尊により説かれ，私に聞かれたということであり，このことにより，自身が不可思議解脱門に到達したこと[が示されるのである]⁸。あるいは，「ある時はこれを，他の機会には別[の教え]を[聞いた]」という意味で，[合誦者は自身の]博識を[示すのである]。[あるいは，]「1つの機会のみ」にこのように聞いて，他の機会はない(*na kadācid anyadā*)ということ，教えが得がたいことを明かしているのである。

「世尊(*bhagavān*)」というのは，主宰者性などの特性(-*guṇa-* = *bhaga-*)を有している(-*yoga-* = -*vat*)からであり，あるいは煩惱・[五蘊・死・天]という[四]魔を破壊する(-*bhañjana-* = *bhaga-*)からである⁹。[そして]このことにより，完全に満たされ浄化

⁷ 「陀羅尼の獲得をさせる」とも訳しうる。経典を憶持して忘れないことを意味する，いわゆる「聞持陀羅尼」(*dhāraṇadhāraṇī*)についての大乗仏典における用例は，氏家 1975 に詳しい。

⁸ 「不可思議解脱門」は，日常的な思考によっては及びつかない奇蹟的な現象を指し，それは空の教えを説き示すために用いられることが多い。『維摩経』の「不可思議解脱法門」はその代表である。上記の本文所掲の「一刹那において世尊により説かれ，私に聞かれた」という表現も同様に，通常の思考を超えた世界の在り方を示すものである。

⁹ ここで説かれている二つの *bhagavān* の語義解釈は以下の偈頌に帰する。

aīśvaryaśya samagrasya rūpasya yaśasah śrīyah |

された福德と智慧の資糧により証得されたすべての自利の完成の卓越性により、教師に余すことない利他の達成を行う能力があることが説示されるのである。

2. 処円満

「すべて[の如来の金剛のごとき身体・言語・心であるところの、ヨーギニーたちの女陰に]」について、[すべての如来とは]すべてであり、如来たちであるもので、[すなわちsarvatathāgata-の複合語はkarmadhārayaであり]、それら[如来たち]の身体・言語・心とは[それぞれ]化身・報身・法身である。[そして]その[三身]は、大楽から成っているから、そしてその[大楽の]原因であるから、金剛ヨーギニーの女陰なのである¹⁰。あるいは、すべての如来の金剛のごとき身体・言語・心とは、世尊金剛薩埵であり、[-vajrayoginī-とは]彼のヨーギニーのことであり、[-yoginībhaga-とは]

jñānasyātha prayatnasya ṣaṅṅām bhaga iti śrutiḥ ||
bhañjanam bhagam ākhyātam kleśamārādibhañjanāt |
prajñāvadhyāś ca te kleśās tasmāt prajñā bhagocyate ||

最初の偈は、おそらく『佛地経論』(**Buddhabhūmīsāstra*)が初出であろう。大正蔵 26, 292a24:薄伽梵者。謂薄伽聲依六義轉。一自在義。二熾盛義。三端嚴義。四名稱義。五吉祥義。六尊貴義。如有頌言、「自在熾盛與端嚴 名稱吉祥及尊貴 如是六種義差別 應知總名為薄伽」。この偈頌は *Nāmantrārthāvalokinī* に引用されている (TRIBE 2016: 232)。この他にも、*Abhisamayālaṅkāra*、*Abhayapaddhati*、Bhavabhāṭṭa 著 *Cakrasaṃvaravivṛti* に引用されており、シヴァ教の文献である *Spandapradīpikā* に類似偈が見られる。これらの情報に関しては TRIBE 2016: 232 の critical apparatus を参照のこと。TRIBE が指摘する文献以外では *Saṃpūṭodbhavantra* が当該偈頌を取り込んでいる (ch.1, SKORUPSKI 1996: 242。ただし、第4パーダは śrutiḥ ではなく smṛtaḥ という読みを採用)。

第二の偈頌に関しては、*Amṛtakaṇikā* に引用されている。*Amṛtakaṇikā* ad *Nāmasaṃgī* 2.1: uktaṃ ca śrīhevajre — bhañjanam bhagam ākhyātam kleśamārādibhañjanāt | prajñābadhyāś ca te kleśās tasmāt prajñā bhagocyate || iti (E^L p. 11, ll. 10 – 12)。*Amṛtakaṇikā* は典拠を *Hevajra* としているが、現行の *Hevajratantra* (*Dvikalpa*) には当偈はなく、おそらく *Hevajratantra* 1.5.15cd–16 を想定しているか、あるいは Raviśrījñāna の見ていた *Hevajratantra* には当偈が収録されていたのであろう。*Hevajratantra* 1.5.15cd–16: athavā kleśādīmārāṇām bhañjanād bhagavān iti || janantī bhanyate prajñā janayati yasmāḥ jagat | bhagīnī tathā prajñā vibhāgam darśayed yathā || (E^S p.16)。

同じ偈頌は *Jinadatta 作 **Guhyasamājjatantrapañjikā* にも引用されている。*Jinadatta's *Guhyasamājjatantrapañjikā*: de bshin du yang gsung pa | rdo rje rtse mo *las (P; la D) | 'joms pa'i phyir na bcom pa ste | nyon mongs bdud la sogs 'jomgs pas || shes rab nyon mong de 'joms phyir || de phyir shes rab bcom par bshad || ces so || (P f. 167r6 – 7, D ff. 149r7 – 149v1)。*Jinadatta は当該偈頌の典拠を *Vajraśekhara* (*rDo rje rtse mo*) であるとしているが、*Vajraśekhara* に見られる bhagavan の nirukti は少々異なるものである。*Vajraśekhara*: bcom ldan 'das ni ci yin brjod || las dang nyon mongs de bzhin skye || de bzhi nyon mongs shes bya'i sgrub || mi mthun phyogs kyi chos rnam gang || de bcom pas na bcom ldan brjod || de yi bcom pa ci yin brjod || bcom ldan de bzhin bcom par brjod || 'dod pa'i 'dod chags gcod byed cing || nyon mongs 'joms shing pham byed pa || de ni de yi bcom par byed || (P 174r8 – 174v2, D ff. 152r7 – 153v2)。

さらに、当該偈頌は Kumāracandra による *Kṛṣṇayamāritantra* に対する註釈書 *Ratnāvalī* にも引用されているが、第2パーダにヴァリエントが見られる。*Ratnāvalī* ad *Kṛṣṇayamāritantra* 1.1: bhañjanam bhagam ākhyātam caturmārādibhañjanāt | prajñāvadhyāś ca te kleśās tasmāt prajñā bhagocyate || (ERD p. 2, ll. 5–6)

¹⁰ つまり Ratnarākṣita は、sarvatathāgata と kāyavākcitta の関係は第6格の tatpuruṣa であり、kāyavākcitta と vajrayoginībhaga が同格の関係にあると解釈している。

その彼女の女陰であるか、あるいは彼女自身が女陰であり、そこに[世尊がいたの
である]¹¹。すべての女性の集合を本質としているので、複数形で示されている¹²。[以
上の]両方[の解釈]においても、法源(dharmodayā-)にある楼閣の内部にいる、という
意味である。無上の教えの快樂・喜悅・樂の場所として、処成就が説明された。

3. 会衆円満

「聖アーナンダを始めとした離欲の者たちを主要な者とした聖観
自在などの80コーティ(8億)のヨーガの自在者たちの中に、金剛手
を認めて笑みを投げかけた。」(Samvarodayatantra 序文)

会衆円満を明らかにするために「聖(ārya-)」で始まる箇所が述べられる。「聖
(āryah)」とは、罪深いダルマから遠く離れて(ārāt)行く(carati = yāti?)からそのように
言われ、仏の教えを三昧を始めとした[実践]をもって喜ぶ(ānandati)から「アーナン
ダ(喜びānandah)」と言われ、それゆえに「聖アーナンダ」と言われる。離欲の者た
ちのうち彼が最初であることがそのような[複合語で表される]¹³。聖観自在などの
菩薩の集団のうち、彼ら[離欲の者たち]が主要である、すなわち第1であることがそ
のような[複合語で表される]¹⁴。

【反論】どのようにしてこの[聴衆の中に]声聞乗の資格を得ている者たちが入
ることが[あり得るのか]? なぜならば彼らは離欲を望んでおり、智慧に劣っているか
らである。というも、

比丘である者たち、論理を好む者たち、年老いた者たちに真実(タントラ
の教え)を示すべきではない¹⁵。

と説かれているからである。【答論】答える。これらの菩薩は声聞に姿を変えた者

¹¹ つまり Ratnaraksita は、sarvatathāgatakāyavākcittavajra (= vajrasattva)と yoginī の関係は第6格の tatpuruṣa であり、yoginī と bhaga の関係は第6格の tatpuruṣa あるいは同格である。そして複合語全体が第7格であると解釈している。

¹² 同様の解釈は *Abhayapaddhati* にも見られる。*Abhayapaddhati*, chapter 1: bahuvacanam sarvayoṣitsamhārarūpatvāc citrasenāyāḥ (E^{Ch} p.3)。【和訳】「[-yoṣidbhageṣu と]複数形なのは、[女尊]チトラセナーがすべての女性の集合を本質とするからである。」

¹³ すなわち Ratnaraksita は、āryānandaprabhṛtīvarāga-の複合語は第6格の bahuvrīhi であると解釈している。

¹⁴ すなわち Ratnaraksita は、āryānandaprabhṛtīvarāgapramukhāryavalokiteśvaryādi-は第6格の bahuvrīhi であると解釈している。

¹⁵ 種村・加納・倉西 2016: (13), (19) – (20) 註(2)に示してあるように、当該偈頌はいくつかの文献に引用されているものの典拠は不明である。もし、*Samkṣiptābhīṣekavidhi* に引用されているように、第1パーダを bhikṣubhāve ratā と読むならば、「比丘であることに執着する」という意味にとれよう。

たちであり(śrāvakanirmāṇadhāriṇaḥ), 声聞たちではないのである。そのことは『非共通の秘密(Asādhāraṇaguhyā)』というヨーガタントラに「普賢がアーナンダである」などと説かれている¹⁶。

【反論】それならば、菩薩の集団を述べることのみにより[聴衆が]認められればよいのであって、どのような目的で個々の者たちが記述されているのであろうか？

【答論】真言理趣において比丘が最上の実践者であることを示すためである。同様に

悪人をとがめることに専念する者を、比丘である持金剛とするべきである¹⁷。

と説かれているのである。金剛手睨下も、在家者や沙弥の阿闍梨と比べて比丘が主要な阿闍梨であることを述べている¹⁸。その一方で、声聞乗のみに宗教的確信を有

¹⁶ 当該引用文については、種村・加納・倉西 2016: (20) 註(3)を参照のこと。

¹⁷ 当該偈頌は *Mahāpratisarā* ([42] v.24. HIDAS 2012: 166) に見いだすことができる。Vagīśvarakīrti 著 *Samkṣiptābhīṣekavidhi* によれば、当該半偈の典拠を「*Mahāpratisarā* 等」としている(種村・加納・倉西 2016: (20) 註(4)を参照)。*Mahāpratisarā* において当該半偈は、身体に護符として身につけられるべき *Mahāpratisarā* の描き方を述べた箇所に出てくる。HIDAS は当該半偈における *bhikṣum* に関して3通りの可能な解釈を提示し(HIDAS 2012: 237, note 238), その中でも *bhikṣum* を複数属格の意味で理解する解釈を採用している。この解釈の場合、当該半偈は「比丘たちにとっては、悪人をとがめることに専念する持金剛を描くべきである」と訳しうる(HIDASによれば、漢訳・チベット語訳・モンゴル語訳すべて *bhikṣum* を複数属格の意味で理解している)。*bhikṣum* が単数対格の場合でも、当該半偈は「悪人をとがめることに専念する、金剛杵を持つ比丘を描くべきである」と訳しうる。いずれにせよ、当該半偈の典拠が *Mahāpratisarā* であるならば、断章取義的に引用されていることになる。

¹⁸ この金剛手睨下(*Vajrapānicarāṇa*)は、*Laghutantraṭīkā* の著者である *Vajrapāṇi* を指している可能性が高い。*Laghutantraṭīkā* 第11章(当該章のトピックは *gaṇacakra*)において、3種類の阿闍梨について言及し、比丘の阿闍梨が最上であることを述べている。*Laghutantraṭīkā*, chapter 11: ācārya 'pi mantranaye trividhaḥ — gr̥hasṭhaś cellako bhikṣur adhamamadhyamottamaḥ || iti. gr̥hasṭho daśatattvaparijñātāpy abhiṣikto 'nujñāto 'pi tulyo na bhavati, tantre bhagavatoktavacanāt (E^C p. 106, ll. 3–6)。【和訳】「一方、真言理趣において阿闍梨に3種類あることが[以下のように説かれている] — 家長、乞食者、比丘[の阿闍梨]は[順に]下・中・上[である]。家長[の阿闍梨は、]十真実を完全に理解し、灌頂を授かっていて、許可を得ていても、[他の2者とは]等しくない。世尊によりタントラにおいて[そのように]説かれているからである。」

同様の趣旨は、*Vimalaprabhā* や *Ācāryakriyāsamuccaya* にも説かれている。*Vimalaprabhā* ad *Kālacakratāntra* 3.3: tathā ādibuddhe — yo gr̥hī maṭhikābhoktā sevako lāṅgalī vaṇik | saddharmavikrayī mūrkhō na sa vajradhāro bhūvi || ityādinā. trividho gurur ācāryaparīkṣāyām ukṭhaḥ — daśatattvaparijñānāt trayāṇāṃ **bhikṣur uttamaḥ** | madhyamaḥ śrāmaṇerākhyo gr̥hasṭhas tv adhamas tayoh || iti. tathā — na kartavyo gurū rājñā bhūmilābhaṃ vinā gr̥hī | tatra śrutaparijñānair liṅgī kartavya eva yaḥ || bhūmilābhaṃ vinācāryo gr̥hasṭhaḥ pūjyate yadā | tadā buddhaś ca dharmas ca saṃgho gacchaty agauravam || tathā — viharādeḥ pratiṣṭhādyam kartavyam liṅginā sadā | satsu triṣv ekadeśe ca na gr̥hīṇā śvetāvāsīnā || iti. evam anekaprakāreṇācāryaparīkṣāyām bhagavatokto guruḥ śiṣyair ārādhāniya(h). (E^{DB} p. 4, l. 16 – p. 5, l. 4)

【和訳】「同様に *Ādibuddha* に説かれている。「在家者、寺院[に供養されるものを]食する者、召使い、鋤を持つ者(農業者?)、商人、正法を売る者、愚か者、このような者は地上において持金剛ではない。」「阿闍梨の考察」において[以下のように]3種類の阿闍梨が説かれている。「十真

する智慧の劣った者たちについての禁止も適用されているのである。

「80コーティ」とは、数え切れないけれども、主要な者が述べられているのである。「ヨーガ」とは智慧と方便の等至であり、止観の双入であり、三昧のことである。その[ヨーガを]有している者たちのうち主宰者が、その優越性の故に、[ヨーガの主宰者-yogésvara-である]。

4. 懇請者円満

「金剛手を」という箇所が、請願者の円満を述べている。大円鏡智を始めとした五智を自性とする三昧を指示する金剛杵を手に、すなわち手のひらに有するごとき者がそのように言われる¹⁹。

「笑みを(smitam)」という言葉は、説法の意図を指示している。聴衆たちは、近づきがたさから如来たちが説法を望んでいることが分からず、絶対に立ち上がろうとしない[、すなわち説法を請願することを躊躇する]ので、世尊たる諸仏は合図を送るのである。例えば、『聖般若波羅蜜』の説示の際に、聖マイトレーヤを見ること・[仏の身体から]光線が発せられること・笑みを見せること、という3種類の合図が示されているのと同様である²⁰。聖観自在などがいても、金剛手のみを見たので

実を理解しているので 3[種類の阿闍梨]の中で比丘が最上である。沙弥が中位であり、[前の]2者よりも在家者は劣っている。」同様に「土地の獲得なしに(?)王は在家者を師とするべきではない。その場合、その者は完全な知識を聴聞した者たちによりリングを有する者とされるべきである。もし、土地の獲得なしに、在家者が阿闍梨として供養されるのであれば、仏法僧が毀損されることになる。」同様に「リングを有する者は常に僧院等のプラティシュターを行ってはいけなない。3[種類の阿闍梨が]1カ所にいる場合に、白衣をまとう在家者により[同様の儀礼が]行われるべきではない。」以上のように「阿闍梨の考察」において、多くの種類に関して[説かれているが]、世尊により説かれている[=認められている者が]師として弟子たちに尊敬されるべきである。 *Ācāryakriyāsamuccaya (Ācāryalakṣaṇavidhi): sa cottmādibhedena trividho bhavati. tadyathā — ācāryas trividhas tantre yathoktaṃ saṃvarāṇave | grhasthaḥ śrāmaṇerākhyo bhikṣuś ceti trividhā bhavet || uttamo bhikṣur ācāryo yasmād uktaṃ tathāgataih | madhyamaḥ śrāmaṇerākhyo grhasthas tv adhamo mataḥ || ... uttame vidyāmane tu nārādhyā anyamatrīṇaḥ || satsu triṣv ekadeśeṣu grhasthaḥ pūjyate yadā | tadā buddhaś ca dharmāś ca saṃgho gacchaty agauravam || iti* (森口 1998: 72.3 - 17)。【和訳】「それ[=阿闍梨]には、最上をはじめとした区分により 3 種類ある。すなわち、「*Samvarāṇavatatra* に説かれているように、阿闍梨には3種類ある。在家者、沙弥、比丘がその3種類である。最上は比丘の阿闍梨である。なぜならば[そのように]如来たちにより説かれているからである。中位は沙弥であり、在家者が最下位であると説かれている。... 最上[の比丘]が存在する場合には、他の真言行者は尊敬されるべきではない。1カ所に 3[種類の阿闍梨]が存在する場合には、在家者が供養されるならば、仏法僧が毀損されることになる。」(Cf. 森口 1998: 73: 4 - 19) 種村 2016: (190)–(195)も参照のこと。

¹⁹ すなわち、Ratnarakṣita は vajrapāṇim を第 6 格の bahuvrīhi として解釈している。

²⁰ Ratnarakṣita が、具体的にどの「般若経」のどの箇所を意図しているのか明らかではないが、例えば、『八千頌般若』の第 28 章冒頭には、仏に散華し讃嘆の言葉を唱える比丘たちに対して、仏が微笑みかける様が描写される。そして微笑みに際して、種々の色彩の光線が仏の口から放たれ、その光線が世界を照らし出し、梵天界にまで上りつめたあと、再び仏のもとに戻り、仏のまわり三度右回りに旋回してから、仏の頭頂に入り込み、消えるという様子を描写する。た

ある。なぜならば、彼には色身と正法の集まりを守護することに長けており、金剛乗を合誦する資格があり、御しがたい者たちを服従させる能力があるからである。

a. 「タントラ」の語義解釈

「金剛手は座より立ち上がり、偏袒右肩して、右膝を地面につけ、合掌して、世尊に請願した。」(*Samvarodayatantra* 序文)

「座より立ち上がり」とは、教えに対する敬意から、教導されるべき者たちへの恩寵から、そして未来の弟子に教授するためである。さらに、この同じ[立ち上がるという行為]により、タントラ全体の意味も示されているのである。なぜならば、タントラ (*tantra*) とは、それにより[その意味が]明確にされることであり(*tantryate*)、解説される(/生起させられる[=立ち上がらせられる])こと(*vyutpādyate*)であるからである²¹。

b. 3種類のタントラ

その[タントラ]には3種類ある。すなわち、方便タントラ、因タントラ、果タントラである。そのことは『[秘密]集会続[タントラ]』に

タントラとは相続であると言われる。そしてその相続には3種類ある。すなわち、基礎、本性、中断されないことである。

(*Guhyasamājatantra* 18.34)

と説かれている。

i. 果タントラ, ii. 因タントラ

その[3種類の]うち、果タントラとは[智慧と方便の]双入を自性とする世尊、吉祥持金剛であり、彼は説法者の本性を述べることのみにもとづいて[そのように]言われるのである。あるいは、たとえこの場合に実践者との関係が結果であるということが適切であるとしても、[教えによる実践が]完成した状態において、[実践者に]これとまったく同様の結果が完成されるので、類似性にもとづいて、[果タントラが持金剛であると]言われるのである。

だしここには聖マイトレーヤに合図を送るという描写はない。

²¹ *Padmīnī* におけるこの *nirukti* のポイントは、*utthā* および *vyutpad* 双方の動詞に「生起する」という共通の意味があることである。すなわち、タントラ（経典）の意味を「生起させるもの」がタントラなのであるから、座より「生起する=立ち上がる」ことがタントラ全体の意味を示したことになるのである。

さらに、タントラの体系において、たとえ実践者が本性上成就している清浄なる仏を内に宿している (buddhagarbha, 如来蔵) としても、望まれた成就是、無垢なる完全な清浄さを対象とすることで[それとは]正反対[の要素]を捨て去ることによりもたらされるのである。[そのことは、]以下のように説かれている ——

いかなる場合においても、仏の境地 (buddhatva) を成就する因は仏との合一である²²。

同様に、ジュニャーナパーダによっても

菩提を享受するものは、自身を普賢であると必ず観想し²³

(*Ātmasādhanaṅvātāra*)

と[説かれている]。[すべての衆生が]仏を内に宿している (buddhagarbha) という教説は、(1) 正覚者の法身が[あらゆる衆生に]遍充していること、(2) [法身と衆生が]真如と不可分であること、(3) [衆生が]仏の境地を成就することが可能であること²⁴、という3つの理由によりなされている。そのことは[以下のように『宝性論』に]説かれている。

正覚者の身体が[あらゆる衆生に]遍満しているから、[その身体が]真如と不可分であるから、そして[衆生に仏となる]素質があるから、すべての有身者たちは仏を内に宿している²⁵。(Ratnagotravibhāga 1.28)

したがって、他ならぬ世尊こそが果である。そして、道は因タントラに依拠して説かれるのである。

B 経序別解（第二の秘儀的な解釈） = iii. 方便タントラ

²² この偈の引用元は未同定。また、Śrīdhara 著 *Sahajālokapañjikā* や *Jnadatta 著 **Guhyasamājatantrapañjikā* にも引用されている。種村・加納・倉西 2016: (21)–(22) 註(10)も参照のこと。

²³ 当該偈頌に関しては、種村・加納・倉西 2016: (22) 註(11)を参照のこと。尚、類似する偈が Jñānapāda の弟子（孫弟子？）である Dīpaṃkarabhadra の著作 *Guhyasamājamaṇḍalavidhi* に見られる。*Guhyasamājamaṇḍalavidhi* v.28cd: samantabhadram ātmānam bhāvayet spharaṇatviṣam || (E^B p. 3)

²⁴ これらは『宝性論』i.27–28 所説の、「一切衆生が如来を内に宿す」(sarvasattvās tathāgatagarbhāḥ) という如来蔵説の基本命題に対する、3種の理由である。

²⁵ 『宝性論』は上記の偈を引用した後に、次のような解説を施す。*Ratnagotravibhāga*: samāsatas trividhenārthena sadā sarvasattvās tathāgatagarbhā ity uktam bhagavatā. yad uta sarvasattveṣu tathāgatadharmakāyāparispharaṇārthena tathāgatataṭhātavyatibhedārthena tathāgatogotrasmābhavārthena ca. eṣāṃ punas trayāṇām arthapadānām uttaratra tathāgatagarbhasūtrānusāreṇa nirdeśo bhaviṣyati (E^J p. 26). この三者は『宝性論』の後出箇所(1.144 – 152)で九喩と関連付けて詳説され、trividhabuddhakāyotpattigotrāsvabhāva と呼ばれる。

「E」字は法源である²⁶。「VAM」字は金剛である²⁷。「私によって(mayā)」とは結合である。「聞かれた(śrutam)」とは液体²⁸となることである。「ある時(ekasmin samaye)に」とは、「身語心による認識の停止を自性とする俱生歓喜の瞬間に」とい

²⁶ 法源(dharmodayā)とは、すべての存在の母体ともいうべきもので、図像的には逆三角形で表現される。これは、子宮との連想による。E字が法源であるとされる理由は、母音Eを表す北インド系の文字が逆三角形に類似していることによる。ISAACSON and SFERRA 2014: 260, note 34 を参照。

²⁷ 周知の通り「金剛」とは男性性器を意味する隠語である。VAM字が男性性器を意味する理由は、VA字の形態が、男性性器を連想させることによる。ISAACSON and SFERRA 2014: 260, note 34 を参照。

²⁸ śrutam を drutāpattiḥ と解釈するのは、-ruta-という音韻からの連想と考えて良いであろう。Ratnarakṣitaによる evaṃ mayā śrutam の解釈は、Ramāpāla 著 *Sekanirdeśapañjikā* の以下の記述に相当するものであると考えられる。

Sekanirdeśapañjikā ad *Sekanirdeśa* v.22:

tarhi tattvaṃ kutra jñeyam. tattvaṃ vittau guror mukhād iti. anena
ṣoḍaśārdhārdhabindudhṛgbhagavato yatrāvasthānaṃ tad āmnāyate. tad āhuḥ —

beṇṇi vi galle beṇṇi vi tulle |

vājja paḍante paṃmu acchuante ||

vājja paṇḍantā akkhobhaḍā paṃmu acchuantā vājja |

kājje kāraṇa muddia ehu so mahāsuharājja ||

(sanskrit chāyā by ISAACSON and SFERRA:

dvāv api galitau dvāv api tulyau | vajrāt patantau padmam āsprantau ||

vajrāt patantau akṣobhyaḥ padmam āsprāntau vajraḥ |

kāryeṇa kāraṇaṃ mudritam eṣa sa mahāsukharājja ||)

etayor vajrarūpasattvarūpayor vajrasattvaśūnyatākaruṇāprajñopāyanirvāṇabhavādivyapadeśo
boddhavyaḥ. ayam eva cārtha utpattikrame mahārāgād drutāpattau
candrārkamadhyasthabundudvayarūpeṇordhvādhovartinā tatra tatra bhagavatā darśitaḥ.
(ISAACSON and SFERRA 2015: 184.5–12)

【和訳】「それでは真実はどこにおいて知られるべきであるのか？[Maitreyanātha は]「師の口伝にあるので、真実は智に存在する」[と述べている]。このことにより、16の半分の半分の滴を持っている世尊の存在する場所が伝承されているのである。[Saraha が?] このことを[以下のように説いている]。

2つ[の滴]が落ち、2つともに等しい。

2つ[の滴]が金剛より落ちつつあり、2つ[の滴]が蓮華に落ちつつある。

金剛より落ちつつある2つ[の滴]は阿闍であり、蓮華に触れつつある2つ[の滴]は金剛[薩埵]である。

原因が結果により印づけられている — これがかの大楽王である。

これら2つ、つまり金剛の本質と sattva の本質が、金剛薩埵、空性と悲、智慧と方便、涅槃と生存、その他[の言葉により]指示されていると知られるべきである。そしてこの同じ意味が、生起次第に関して、大食欲により滴となる[段階]において、[順に]上下にある月輪と日輪の間にある2つの滴の形で、あらゆる箇所では世尊により説かれているのである。」(当該箇所の英訳に関しては、ISAACSON and SFERRA 2015: 294.9–295.7 を参照のこと。)

ISAACSON および SFERRA は、当該部分のポイントは「月輪と日輪の間にあり、両者に触れている2つの滴として顕れている世尊が、俱生あるいは真実の瞬間が、それら菩提心の滴が「金剛」の外にあり(かつ金剛に触れていて)、蓮華とともにある時であることを象徴している」と記している(ISAACSON and SFERRA 2015: 295, note 230)。これを参考にするならば、*Padminī* の当該箇所にも引き続き ekasmin samaye の解釈は、この俱生の瞬間を表しているとして理解してよいであろう。

うことある²⁹。世尊とは大楽と不可分な身体を有する菩提心金剛³⁰である。「いらした」とは、すべてのものに遍充するものとしていた、ということである。そのことは、[以下のように]説かれている。

E字は女陰であると説かれている。VAM字は金剛であると伝承されている。私によって(mayā)とは揺らすことである³¹と説かれている。聞かれた(śrutam)とは二様に説かれている³²。

世尊は精液の形をとり、その楽が恋人[=女尊]であると伝承されている。金剛薩埵の特徴は、法身と報身の姿をとることである³³。

あるいは[以下のように]説かれている――

E字は地であり、羯磨印であり、ローチャナーであると知られるべきである。[それは、]臍の64の花弁を有した[蓮の姿をした]変化輪にある。

VAM字は水であり、法印であり、マーマキーであると知られるべきである。[それは、]心臓の8の花弁を有した[蓮の姿をした]法輪にある。

MA字は日であり、大印であり、パーンダラー[ヴァーシニー]であると説

²⁹ 注 28 参照。

³⁰ 注 28 に引用された *Sekanirdeśapañjikā* の記述を参照するならば、この菩提心金剛とは「2つの滴」として顕れている世尊のことであろう。また *Padminī* で直後に引用される偈頌を参照するならば、この世尊は精液の形を取る。

³¹ 「揺らすこと(cālanam)」は、milanam に相当し「(性的)結合」を意味する。「揺らす」を意味する動詞、あるいはそれに由来する名詞が性交を意味する専門用語として使用されるのは、シャークタ的シヴァ教の影響であると考えられる。例えば *Brahmayāmala (Picumata)* 45.298cd: kṣobham tu prathamam kṛtvā āsananyāsavarjitam (Kiss 2015: 149). (Trsl. by Kiss) ‘First, he should bring about an orgasm, without [any] throne[-visualisation] or mantric installation (nyāsa).’ (Kiss 2015: 270)

この用語法を取り入れた最初の密教文献は、おそらくは『真実撰経』であろう。*Sarvatathāgatattvasaṃgraha* §1160: tato rahasyakarmamudrājñānam śikṣayet. priyayā tu striyā sārḍham saṃvasaṃ tu bhage ’ñjanam | prakṣipyā ghaṭṭayet tatra tenāñjyākṣi vaśam nayet || 【和訳】「次に秘密行為印智を学ぶべきである。美しい女性を伴い、[彼女の]女陰に軟膏を塗り、「揺らす」べきである。そしてその[軟膏]を目に塗れば、[対象を]自由にすることができる。」

³² 註 33 参照。

³³ 種村・加納・倉西 2016 においてすでに示している通り(p.(22), note 12), この 2 偈は *Yogarātnāmālā* に引用されている。そしてこの 2 偈の直後には、以下の文が引き続く。*Yogarātnāmālā*: tathā ca — *sāmvr̥tam (E^S; samvr̥tam E^{TN}) kundasaṃkāśam vivr̥tam sukhārūpiṇam ity anenādivākyena śūnyatākaraṇāśvabhāvaṃ prajñopāyasvabhāvaṃ dharmasaṃbhogakāya*svarūpaṃ (E^S; °svabhāvaṃ E^{TN}) saṃvr̥tiparamārthasvabhāvaṃ utpattīutpannakramarūpaṃ tantrārtham uddeśayati (E^S p. 103, l. 33 – p. 104, l. 2; E^{TN} p. 2, ll. 17 – 20). 【和訳】「同様に、「世俗はジャスミンに似て、勝義は楽の姿を取る」などの文により、[世尊は、]空性と悲を自性とし、法身と報身を自性とし、世俗と勝義を自性とし、生起次第と究竟次第の姿を取るタントラの意味を説くのである。」この記述を参照するならば、引用されている偈にある「二様に」とは、空性と悲、智慧と方便、法身と報身、世俗と勝義のことであり、さらに註 28 で引用した *Sekanirdeśapañjikā* からの一節を参照するならば、涅槃と輪廻も加えることができるであろう。

かかれている。[それは、]喉の16の花弁を有した[蓮の姿をした]報輪にある。
YĀ字は風であり、三昧耶印であり、ターリニー（ターラー）であると説
かかれている。[それは、頭頂の]32の花弁を有した[蓮の姿をした]大楽輪に
ある。
聞かれた(śrutam)とは俱生である³⁴と説かれている。この[俱生]は二種類で
ある³⁵。

残りは先と同様である。「聖者であるアーナンダを始めとした(āryānandaprabhṛti)」
という[語に関して、聖者であるアーナンダとは]出世間の歡喜であり、
[āryānandaprabhṛtivītaという複合語は?]」「最高歡喜を始めとするとき」という意味
である³⁶。「āryāvalokita (聖なるもの=歡喜により見下ろされた)」とは、貪欲を始め
とした80の自性(prakṛti)が、それら[prakṛti]の本性である空性と一味である大楽と合
一することにより、[その歡喜に]従属するので、主宰者であり、[それら主宰者の]
中で[という意味である]³⁷。さらに[そのことは]

煩惱が菩提の支分となる³⁸

³⁴ 「聞かれた(śrutam)」が俱生であることに関しては、註28を参照。

³⁵ すでに種村・加納・倉西2016において指摘しているように、当該引用偈は *Yogaratanamālā* に引用されている。*Yogaratanamālā* における引用では、さらに以下のような1偈半が引き続く。
Yogaratanamālā: sāmvyṛtaṃ devatākāram utpattikramapakṣataḥ | *vivṛtiḥ (E^{TN}; vivṛti^o E^S) sukhārūpaṃ tu niṣpannakramapakṣataḥ | satyadvayaṃ samāśritya buddhānāṃ dharmadeśanā || tathā cānyatra — utpattikramapakṣam ca utpannakramam eva ca | kramadvayaṃ upādāya deśanā vajradhāriṇām || (E^S p. 104, ll. 16–21; E^{TN} p. 3, ll. 13–18) 【和訳】「[2種類とは、]生起次第の側面における世俗的な尊格の形象と究竟次第の側面における勝義である樂の形である。[これらの]二真実に依拠して諸仏の法の説示がある。」同様に別[の文献では以下のように説かれている] — “生起次第と究竟次第、これら2つの次第に基づき持金剛たちの説示がある。”この後続部分を参照するならば、引用偈における「2種類」とは、勝義=究竟次第と世俗=生起次第を意味することになる。

³⁶ āryānandaprabhṛti-という複合語に関して、これを paramānandādi-と解釈していることは明らかである。引き続く文章で合成語中の vīta という語が解釈されていないように見えるが、āryānandaprabhṛtivīta-を「paramānanda が「去り」次の歡喜（当該部分の文脈から判断して、無分別智を体験する俱生歡喜）を体験する時」という意味で paramādau sati と解釈していると考えられる。

³⁷ この箇所は、当該複合語中の rāgapramukhāryāvalokteśvarādyāśītikotiyogeśvaramadhye を解釈している箇所である。Ratnarakṣita は複合中の rāgapramukha+āśīti+ īśvara の部分を rāgādyāśītiprakṛti と解釈する。īśvara を prakṛti と解釈するのは、この2語が複数の第6格で同格であることより判断される。次に-āryāvalokita-の部分を ānandaguṇībhūta→ānandena guṇībhūta-と解釈する。さらに -kotiyoga-の部分を svabhāvabhūtaśūnyataikarasamahāsukhayoga-と解釈している。koṭi が「本性 (svabhāva)=空性と一味の大樂」と解釈されるのは、koṭi が bhūtakoṭi を意味していると解釈されているからであろう。尚、当該複合語中の-āryāvalokteśvarādi-の末尾の ādi が註釈されていないことを考慮するならば、Ratnarakṣita の見たタントラの本文において、当該複合語にこの ādi が含まれていなかった可能性も考えられる。

³⁸ 当該引用文に関しては、種村・加納・倉西2016: (23)–(25), note (15)を参照のこと。

と説かれている[通りである].「金剛手」とは不二の智である.「見て」とは経験して[という意味である].「座より立ち上がり」とは,その三昧にもとづいて,あるいは秘部[に位置する]チャクラから[上昇する,という意味である].「偏袒右肩して」とは,最高点(頭頂のチャクラ)に到達し,[という意味である].「右の膝頭を」とは,「如来の習慣的表現により清浄なる報身を³⁹⁾」[という意味である].「地面に」とは「法性に」[という意味である]⁴⁰⁾.まさにその理由で,「両手を器の形に組んで」とは,「生存および生存の止滅と不可分となり」という意味である⁴¹⁾.「世尊に」とは「その同じ不二の智である尊者に」という意味である.「請願した」とは,「努力すること無く衆生のために[説法することを]促した」という意味である⁴²⁾. [序分が]繰り返し説明されるので,これらの説明が[相互に]無関係ではないのである⁴³⁾.こ

³⁹⁾ 如来の習慣的表現とはここでは,タントラ中の「笑み(smita)」であろう.当該部分が「報身」と解釈されるのは,おそらく jānumaṇḍalam と maṇḍala との連想であろう. maṇḍala に出生される諸尊格は報身である.

⁴⁰⁾ evaṃ mayā の字義解釈の教証として引用された2組の偈頌群のうち,後半最初の偈頌では「E字=地」とであるとされている.さらに「経序別解」の最初で, Ratnarakṣita は「E字=法源」という解釈を提示している.この両者を参照するならば,「地面=E字=法源=法性」という解釈が成り立つと考えられる.

⁴¹⁾ ここでは両手がそれぞれ「生存」と「生存の止滅」を表し,両手が合わさっている状態がその両者の不可分を象徴している,という意味であろう.さらに言うならば,恐らくは右手(浄)=生存の止滅=涅槃,左手(不浄)=生存=輪廻であると考えられる.

Cf. この「生存」と「生存の止滅」の不可分については,例えば『宝性論』に以下のような記述が見られる. *Ratnagotravibhāga* ad 1.38: tad anena dharmadhātunayamukhena paramārthataḥ saṃsāra eva nirvāṇam ity uktam | ubhayathāvikalpanāpratiṣṭhitanirvāṇasākṣātkaraṇataḥ | (E¹ p. 35, ll. 3–4). 【和訳】「それゆえ,この法界理趣の点から,勝義の立場からは,輪廻こそが涅槃であると説かれる. [輪廻と涅槃とが]二様であるという概念構想をしないことにより無住処涅槃を目の当たりにするからである.」

⁴²⁾ 以上の秘儀的な解釈によれば, Ratnarakṣita の意図する序文の意味は,大方以下のようになる.「法源と金剛が結合し,液体のしずくとなった,身語心による認識の停止を自性とする俱生歓喜の瞬間に,大楽と不可分な身体を有する菩提心金剛は,すべてのものに遍充するものとしていた.最高歓喜を始めとすると,すなわち出世間の歓喜[=俱生歓喜]があるとき,大楽との結合により歓喜に従属した食欲を始めとした80の自性のうちに,不二の智を経験し,笑みをなした.そしてその不二の智は,その三昧にもとづいて,あるいは秘部に位置するチャクラから,上昇し,最高点[=頭頂のチャクラ]に到達し,清浄なる報身を法性に安住させ,生存およびその止滅と不可分となり,その同じ不二の智である尊者に[法を説くように]促した.」

すなわち Ratnarakṣita は,序文が性的ヨーガにより無分別智を得る過程を意図していると解釈しているのである.当該解釈中に見られる「80の自性(aśītiprakṛti)」という語は,『秘密集会タントラ』聖者流の究竟次第の実践に見られる用語である.聖者流の究竟次第の実践階梯では,「心の聖化(cittaviveka)」の段階で,80の自性を順次消滅させ,空(sūnya),極空(atīśūnya),大空(mahāśūnya)の状態を現前する.そしてこれらの三空は,最終的には仏の智慧に対応づけられる一切空(sarvaśūnya)に帰滅するとされる.聖者流の究竟次第の実践体系のアウトラインについては,御牧・苜米地 1996,特に註記を参照のこと.80の自性への言及から,Ratnarakṣita の解釈には聖者流の影響が見て取れる. Ratnarakṣita の相承した究竟次第の詳細については,将来の研究課題としたい.

⁴³⁾ 校訂テキストの apparatus にも示してあるように,サンスクリット語3写本の支持する当該部

の同じ[序文]によって、方便タントラも説明されているのである。なぜならば、方便とは質量因(実質的な原因)であるところの因タントラにとっての共働因に相当するからである⁴⁴。あるいは、[因・方便・果の]3つのタントラがすべて、この同じ説明により述べられたと理解されるべきである。一方、別の限定条件である因と果の関係は後で述べることにしよう。

参考文献

1. 一次文献

a. サンスクリット語文献

Abhayapaddhati. E^{Ch} = CHOG Dorje (ed.) *Abhayapaddhati of Abhayākaragupta: Commentary on the Buddhakapālatantra*. Sarnath, Varanasi: Central Institute of Higher Tibetan Studies, 2009. Bibliotheca Indo-Tibetica Series 68.

Abhisamayālaṃkāṛālokā. WOGIHARA, Unrai (ed.) 1932 – 1935. *Abhisamayālaṃkāṛ'ālokā Prajñāpāramitāvyaḥkyā (Commentary on Aṣṭasāhasrikā-Prajñāpāramitā) by Haribhadra, together with the Text Commented on*, Tokyo: The Toyo Bunko.

Amṛtakaṇikā by Raviśrījñāna. E^L = LAL, Banarsi. (ed.). 1994. *Āryamañjuśrīnāmasaṃgīti with Amṛtakaṇikā-ṭippanī by Bhikṣu Raviśrījñāna and Amṛtakaṇikodyotanibandha of Vibhūticandra* (sic.), Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies. Bibliotheca Indo-Tibetica 30.

Ācāryakriyāsamuccaya by Jagaddarpaṇa. *Ācāryalakṣaṇavidhi*は森口1998を参照。

Guhyasamājamaṇḍalavidhi by Dīpaṃkarabhadra. E^B = Śrīguhyasamājamaṇḍalavidhiḥ of *Ācārya Dīpaṃkarabhadra*. Sarnath, Varanasi: Rare Buddhist Texts Research Unit, Central University of Tibetan Studies, 2010. Rare Buddhist Texts Series 31.

Nāmamantrārthāvalokinī by Vilāsavajra. TRIBE 2016を参照。

Padminī, a cometary on the *Samvarodayatantra* by Ratnarakṣita. 写本資料については種村・加納・倉西2014a, 及び同2016「写本資料および略号」を参照。チベット語訳については同じく種村・加納・倉西2014a, 及び同2016「チベット語訳文献」を参照。

分の読みは *nābhisambandhaḥ* であり、テキストでは文脈およびチベット語訳('brel ba med pa ma yin no)から *nānabhisambandhaḥ* と emend した。

⁴⁴ すなわち、因タントラが *upādāna* で、方便タントラが *sahakārin* で、果タントラが *phala* であることを示している。

Brahmayāmala (Picumata). KISS 2015を参照.

Mahāpratisarā. HIDAS 2012を参照.

Yogaratnamālā, a commentary on the *Hevajratantra* by Kāṇha. E^S = SNELGROVE 1959, pt.2, pp. 103 – 159; E^{TN} = TRIPATHI, Ram Shankar and Ṭhākurasena NEGI (eds.) *Hevajratantram with Yogaratnamālāpañjikā of Mahāpaṇḍitācārya Kṛṣṇapāda*, Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies, 2006.

Ratnagotravibhāga. E^J = JOHNSTON, E. H. (ed.). *The Ratnagotravibhāga Mahayanottaratantrasastra*, Patna: The Bihar Research Society. 1950.

Ratnāvalī, a *pañjikā* on the *Kṛṣṇayamāritantra* by Kumāracandra. E^{SD} = RINPOCHE, Samdhong and Vrajvallabh DWIVEDI (eds.) *Kṛṣṇayamāritantram with Ratnāvalī Pañjikā of Kumāracandra*, Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies. Rare Buddhist Texts Series 9.

Laghutantraḍīkā by Vajrapāṇi. CICUZZA 2001を参照.

Vimalaprabhā. DWIVEDI, Vrajvallabh, and S. S. BAHULKAR (eds.) E^{DB} = *Vimalaprabhāḍīkā of Kakin Śrīpuṇḍarīka on Śrīlaghukālacakratantrarāja by Śrīmañjuśrīyaśas*, vol. 2. Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies, 1994. Rare Buddhist Texts Series 12.

Saṃpuṭodbhavantra. Chapter 1 is edited in SKORUPSKI 1996.

Sarvatathāgatattvasaṃgraha. 堀内1983を参照.

Sahajālokapañjikā, a commentary on the *Kṛṣṇayamāritantra* by Śrīdhara. MS: Tucci's Collection, Original Number 15/LVIII, List Number Tucci sscr 7. SFERRA 2008: 62を参照.

Sūtaka(-melāpaka) (commonly known as *Caryāmelāpakapradīpa*). WEDEMEYER 2007を参照.

Sekanirdeśapañjikā by Rāmapāla. ISAACSON and SFERRA 2015を参照.

Hevajratantra. SNELGROVE 1959を参照.

b. チベット語訳文献

gSang ba 'dus pa 'i rgyud kyi dka' 'grel (**Guhyasamājatantrapañjikā*). Translation of the commentary by rGyal bas byin (*Jinadatta) on the *Guhyasamājatantra*. Ota. No. 2710, *rgyud 'grel*, vol. *chi*, ff. 162v1 – 364r7; Toh. No. 1847, *rgyud*, vol. *nyi*, ff. 145r7 – 318r7.

gSang ba rnal 'byor chen po 'i rgyud rdo rje rtse mo. Translation of the *Vajrasāekharatantra*.

Ota. No. 113, *rgyud*, vol. *nya* ff. 162v2 - 301v8; Toh. No. 480, *rgyud*, vol. *nya* 142v1 - 274r5.

c. 漢訳文献

『佛地經論』 *Fódi jīng lùn*. 大正藏 No. 1530, vol. 26, 291b2 - 328a6.

2. 二次文献

a. 和文

氏家昭夫. 1975. 「聞持陀羅尼について:ダラニの原意とその展開」『印度学仏教学研究』 23-3, pp. 550 - 560.

種村隆元. 2016. 「Padmaśrīmitra 著 *Maṅḍalopāyikā* — *Samvaragrahaṇādividhi* の Preliminary Edition および試訳 —」『小峰彌彦先生・小山典勇先生古稀記念 転法輪の歩み』(智山学報65), 東京・智山勸学会, pp. 177 - 204.

種村隆元・加納和雄・倉西憲一. 2014a. 「Ratnarakṣita 著 *Padminī* 研究資料概観」『大正大学総合佛教研究所年報』 36, pp. (163) - (176).

種村隆元・加納和雄・倉西憲一. 2014b. 「ラトナラクシタ著『パドミニー』の冒頭偈および廻向偈」 *Acta Tibetica et Buddhica* 7, pp. 139 - 149.

種村隆元・加納和雄・倉西憲一. 2016. 「Ratnarakṣita 著 *Padminī* 第1章前半 — Preliminary Edition および註 —」『川崎大師教学研究所紀要』 1, pp. (1) - (33).

堀内寛仁. 1983. 『梵藏漢対照 初会金剛頂経の研究 — 梵本校訂篇 上 金剛界品・降三世品—』高野山・密教文化研究所.

御牧克己・苦米地等流. 1996. 「秘密道次第大論 (究竟次第の章前半)」御牧克己・森山清徹・苦米地等流訳『大乘仏典<中国・日本篇>第15巻 ツォンカパ』東京・中央公論社, pp. 147 - 164 (和訳), 257 - 291 (訳注).

森口光俊. 1998. 「Ācāryakriyāsamuccaya 序品 *Vajrācāryalakṣaṇavidhi* テキストと和訳 — アジャリの特相について —」佐藤隆賢博士古稀記念論文集刊行会(編)『仏教教理・思想の研究 — 佐藤隆賢博士古稀記念論文集 —』東京・山喜房仏書林, pp. 63 - 83.

b. 欧文

CICUZZA, Claudio. 2001. *The Laghutantraṭīkā by Vajrapāṇi: A Critical Edition of the Sanskrit Text*. Roma: Istituto Italiano per l’Africa e l’Oriente. Serie Orientale Roma 86.

HIDAS, Gergely. 2012. *Mahāpratisarā-Mahāvīdyārājñī: the Great Amulet, Great Queen of*

- Spells : Introduction, Critical Editions and Annotated Translation*, New Delhi : International Academy of Indian Culture and Aditya Prakashan. Śata-piṭaka Series 636.
- ISAACSON, Harunaga and Francesco SFERRA (eds.) with contributions by Klaus-Dieter MATHES and Marco PASSAVANTI. *The Sekanirdeśa of Maitreyaṅgāthā (Advayavajra) with the Sekanirdeśapañjikā of Rāmapāla: Critical Edition of the Sanskrit and Tibetan Texts with English Translation and Reproductions of the MSS*. Napoli: Università degli studi di Napoli "L'Orientale", 2014. Serie Orientale Roma 107, Manuscripta Buddhica 2.
- KISS, Csaba. 2015. *The Brahmayāmalatantra or Picumata, Volume II: The Religious Observances and Sexual Rituals of the Tantric Practitioner: Chapters 3, 21, and 45*. Institut Français de Pondichéry / École française d'Extrême-Orient. Collection Indologie 130. Eary Tantra Series 3.
- SKORUPSKI, Tadeusz. 1996. "The *Samputa-tantra*: Sanskrit and Tibetan Versions of Chapter 1." In: SKORUPSKI, Tadeusz (ed.). *The Buddhist Forum Volume IV: Seminar Papers 1994*, London: School of Oriental and African Studies, University of London.
- SNELLGROVE, David L. 1959. *The Hevajra Tantra : a Critical Study*. London: Oxford University Press. 2 volumes. Vol. 1. Introduction and Translation. Vol. 2. Sanskrit and Tibetan Texts.
- TRIBE, Anthony. 2016. *Tantric Buddhist Practice in India: Vilāsavajra's Commentary on the Mañjuśrī-nāmasaṃgīti, A Critical Edition and Annotated Translation of Chapters 1 – 5 with Introductions*. London and New York: Routledge. Routledge Studies in Tantric Traditions.
- WEDEMEYER, Christian K. 2007. *Āryadeva's Lamp That Integrates the Practices (Caryāmelāpakapradīpa): the Gradual Path of Vajrayāna Buddhism according to the Esoteric Community Noble Tradition*, New York: The American Institute of Buddhist Studies at Columbia University. Treasury of the Buddhist Sciences Series.

(平成28年度科学研究費「密教思想と他の仏教思想との関係性—ヴィクラマシーラ寺院の学僧の著作群を中心に—」[基盤研究(B), 26284008, 代表: 久間泰賢]による研究成果.)